

投句・選句 柿崎忠彦 久米五郎太 熊谷くにお 小早健介 後藤とみ子 在間千恵

佐藤ただしげ 高橋康敏 田島正己 土谷堂哉 豊田ゆたか 西澤國護 福島正明

古川百合子 古田昇 星田啓子 山崎亜也 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 伊賀山そらお、梅崎くすを 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子 橋口隆 山本三恵



【互 選 句】 選者欄(括弧内)の○は選者の「天」

十二点

漁火も星のひとつに星月夜

昇

(くす・健・五・た・孝・清・康・堂・ゆ・○正・啓・け)

十一點

流灯の意志ある如く進み出す

昇

(○くす・く・健・五・と・千・龍・清・堂・百・亜)

十點

子供山車しんがりを行くベビーカー

康敏

(そ・くす・く・と・龍・清・堂・百・亜・天)

八點

信濃路に馬子唄冴える夏祭り

ただしげ

(そ・健・己・堂・ゆ・國・正・昇)

——信濃追分にて——

七點

水割の氷ことりと夜の秋

康敏

(○そ・五・千・隆・百・○啓・け)

五點

汗しとど断捨離一步進めたり

千恵

(忠・龍・己・啓・○三)

橋渡り郡上踊りの下駄の音

けい子

(そ・康・國・正・天)

四點

冬瓜を美味と思へるきのふけふ

とみ子

(隆・亜・天・盛)

棚経や小坊主二人初見参

堂哉

(と・正・三・天)

箱根路や天に連なる桐の花

ゆたか

(く・と・己・け)

夜夜ふけて下駄の音揃ふ踊りの輪

けい子

(五・千・己・啓)

あきつ飛ぶいづくの山ゆ群れ来る

亜也

(健・○己・啓・三)

三點

指先に残る余韻や松葉花火

忠彦

(五・國・啓)

早稲を刈る天にこだまのコンバイン

くにお

(○健・昇・○盛)

賜りし色紙の一句墨涼し

全

(五・孝・啓)

仏兄の名ある短冊秋の空
万の悲話集めて綴ちて敗戦記
星砂を小瓶に詰めて夏終る
眠れぬ夜寄り添ふごとく蟬の鳴く
佃堀子等と鯨釣る雪駄履き
秋何処仄かに黄差す柿の色
美しき球児の涙残暑消ゆ

五郎太
堂哉 昇
啓子
亜也 全
盛雄
(くす・康・啓)
(くす・清・盛)
(忠・と・康)
(孝・ゆ・け)
(く・清・啓)
(龍・孝・盛)
(と・た・ゆ)

二点

しばみゆく朝顔惜しむ夕間暮れ
百日紅百日続く朱の力
秋めくや朝の空気が教えけり
下駄の音次第に高く盆踊り
淀の夏陵守る埴輪たち
ベランダの蔦の鉢にと日傘置く
子ら誓ふ清む声空へ原爆忌
炎帝の怒り恐れて家籠り
冷蔵庫なんとなく開け閉めにけり
雷鳴に愛犬震えしがみつく
夕立に拍手にビール朝までと
末期的な関税競争夏の果て
八十年遠くて近きヒロシマ忌
肅々と五山送り火点りゆく
念仏を唱ふ佃の踊りかな
いくたびも國憂ひけり生身魂

忠彦 全 全
五郎太 全
千恵 全
千恵 全
ただしげ 全
康敏
國護 全
正明 全
昇 全
亜也 全
盛雄
(た・〇孝)
(千・堂)
(た・〇龍)
(百・け)
(千・三)
(健・孝)
(た・〇昇)
(く・國)
(忠・百)
(忠・ゆ)
(龍・隆)
(忠・國)
(忠・正)
(そ・清)
(康・天)
(己・三)

一点

カキ氷頭にキーンで目眩する
阿房になり吾も踊りし阿波踊り
秋雷に追はれるように駅舎へと
将来は大看板や盆芝居
灯台や海猫(ごめ)のこゑ染む磯の岩
宮邸のラリック像や処暑の風
おのこふたり手つなぎ前を風涼し
大輪の一期一会の蓮の花
早暁に蛸の鳴く軽井沢
長岡の夜空に開く平和の花
熱闘の甲子園にも夏の果
トレモロの流るる涼味暑き夜半
花石榴雨降る後の日に光る
火柱の嶺移りおり今朝の雷
この酷暑連日ゆでる揖保乃糸

忠彦
健介
とみ子 全
全
千恵 全
全
ただしげ 全
全
正己 全
堂哉
ゆたか 全
國護
(隆)
(そ・)
(國)
(康)
(盛)
(昇)
(亜)
(千)
(天)
(正)
(け)
(盛)
(隆)
(堂)
(昇)

盆帰省大役果たし疲れ果て	國護	(くす)
酷暑日や富士もいささか威厳なし	百合子	(ゆ)
川端に蛙(かはず)顔出す遠花火	啓子	(隆)
空蟬の柿の葉裏に二つ三つ	全	(く)
早朝の青き蜜柑の憩ふごと	全	(垂)
草むらに真白き網の翻る	全	(百)
門火焚く子のはしやぎ声風が舞ふ	けい子	(た)
夏の夜や呆け老人の独り言	天牛	(昇)

【句 評・短 評】

十二点句

漁火も星のひとつに星月夜

昇

五郎太さん・・・海ならではの、美しい景です。

ただしげさん・・・美しい夜の海の風景が目には浮かびます。

康敏さん・・・海岸には素晴らしい星空が広がる。漁火が星空に溶け合う。昔は沖合に沢山の漁火が

見えたが、昨今は少なくて寂しい。

堂哉さん・・・綺麗な景色ですね！

十一点句

流灯の意志ある如く進み出す

昇

五郎太さん・・・お盆にテレビ中継を見ていました。風や流れのせいでしょうね。

とみ子さん・・・意思ある如くの「音」が、流灯の動きを語っています。

龍平さん・・・自分の気持ちがあたかも 灯に乗り移ったように。不思議です。

堂哉さん・・・テレビで映像を見ると、正に意思ある如くです。

百合子さん・・・いつも感じていました。流灯に魂が乗り移っているかのよう。

亜也さん・・・また来年の盆に：

十点句

子供山車しんがりを行くベビーカー

康敏

とみ子さん・・・ベビーカーも一緒に 上のお子さんに付き添っているのが、微笑ましい。

龍平さん・・・ベビーカー 平和日本。

堂哉さん・・・親子の笑顔が目には浮かびます。

百合子さん・・・若いお母さんの一生懸命な様子が目に浮かびます。

亜也さん・・・革命記念日のパレードなら外人部隊の役どころ。夏の句なのが玉に瑕。

天牛さん・・・きつとお母さんでしょうね。子供に祭りを味あわせたいのでしょう。

八点句

信濃路に馬子唄冴える夏祭り

ただしげ

——信濃追分にて——

堂哉さん・・・丸紅コーラスの先輩に馬子唄のとても上手な先輩がおられました。懐かしいお顔が浮かびました。

七点句

水割の氷ことりと夜の秋

康敏

五郎太さん・ゆつくりと溶けて落ちる氷。夜になると秋らしさを感じる。夜の秋がいいと思います。
千恵さん・夜更けに一人ウイスキーのロックを楽しんでるのですね。“氷ことりと”が良いですね。

隆さん・季重なりを避けて「水割りにコトリと音の夜の秋」でも。
百合子さん・静けさの表現が巧みですね！

五点句

汗しとど断捨離一步進めたり

千恵

三恵さん・まさしくこの三か月思い切って、断捨離にいそしんだ身にはずばり共感。「汗しとど」とは絶妙表現、季語なんですね。それにしてもいい汗を流されました。

橋渡り郡上踊りの下駄の音

けい子

康敏さん・郡上八幡は水の町である。橋の上で踊り子の下駄の音が一層高く響き合う。素敵なところを眼を付けた。

天牛さん・秋は踊りのシーズンです。風の盆の静けさに対して下駄の音の動を感じました。

四点句

冬瓜を美味と思へるきのふけふ

とみ子

隆さん・「冬瓜の味を覚へし年頃に」でも。

亜也さん・旬は夏でも旬にできるのは秋。

天牛さん・薄味の冬瓜の煮物の美味しさに老いを感じます。

盛雄さん・食通の健康老人が愛でる京料理、よろしおす。

棚経や小坊主二人初見参

堂哉

とみ子さん・お寺の跡継ぎでしょうか。檀家さんも安堵して 応援するでしょうね。

天牛さん・お盆の訪問はだんだん数が増えて手が足りなくなってきたのでしょうか。いい俳句ですね。

箱根路や天に連なる桐の花

ゆたか

とみ子さん・お山の高さを 想像させます。

夜夜ふけて下駄の音揃ふ踊りの輪

けい子

五郎太さん・郡上では四日間明け方まで踊ります。下駄の底を鳴らす振りは独特。

千恵さん・30日も続くかという郡上盆踊りでしょうか。下駄の音のリズムも心地良さそう。私も踊ってみたいなあ。

あきつ飛びいづくの山ゆ群れ来る

亜也

正己さん・中句がいいですね。自然の壮大さが感じられます。

万の悲話集めて綴ちて敗戦記

堂哉

盛雄さん・昭和二十年の八月六日、九日、十五日、終生忘れることはない。

三点句

指先に残る余韻や松葉花火

忠彦

五郎太さん・・・大きく弾けて、やがてポトッと散る線香花火。日本の夏です。

啓子さん・・・指先に残る余韻、が繊細な線香花火を表現して良いなあと思います。

早稲を刈る天にこだまのコンバイン

くにお

健介さん・・・「天にこだま」は雄壮で、豊作を告げているかのよう。

盛雄さん・・・にぎにぎしい米談義の中、心地よき時事句。『天にこだま』が効きました。

賜りし色紙の一句墨涼し

くにお

五郎太さん・・・どんな句だったのでしょうか？下五が巧みです。

仏兄の名ある短冊秋の空

五郎太

康敏さん・・・仏門の兄弟子の有名な句の短冊が秋空に揺れる。尤も鬼貫が仏兄の俳名を使っていた。

星砂を小瓶に詰めて夏終る

昇

とみ子さん・・・夏の思い出も星砂と一緒に小瓶に詰められたのでしょう。

康敏さん・・・家族旅行で沖繩へ、小瓶に星砂を詰めて夏休みは終った。連日の猛暑だったが、夏の終りのさやかな涼味が感じられる。

佃堀子等と鯨釣る雪駄履き

亜也

啓子さん・・・鯨はお江戸のころからこうして庶民の食卓に上がっていたでしょう。池波正太郎の物語が想起されます。佃堀に雪駄、ご近所での鯨釣り、絵になります。

秋何処仄かに黄差す柿の色

亜也

盛雄さん・・・連日猛暑の厳しい夏。しかし柿の色に小さな秋を感じる。佳句。

美しき球児の涙残暑消ゆ

盛雄

とみ子さん・・・球児の涙に感情移入すると、ひととき暑さを忘れます。

ただしげさん・・・夏の甲子園、いつも感動させられる

二点句

しばみゆく朝顔惜しむ夕間暮れ

忠彦

孝岳さん・・・朝顔に託して人生の黄昏を惜しむ心情が溢れている。藤沢周平の時代小説を想起して共感しました。

百日紅百日続く朱の力

忠彦

千恵さん・・・さすが長期にわたり咲く花だけあって暑さにも負けないその力強さに敬服
堂哉さん・・・我が家のは今年は六十日で殆ど散りました。

秋めくや朝の空気が教えけり

忠彦

ただしげさん・・・早く秋めいてほしい

龍平さん・・・海拔100メートルの我が家 難点も有るが 季節の変わり目をそこはかと無く知らせる 朝の空気 有り難し

下駄の音次第に高く盆踊り

五郎太

百合子さん・・・盆踊りの高揚感が伝わって来る一句。

淀の夏陵守る埴輪たち

五郎太

千恵さん・・・いにしえに想いを馳せるひと時ですね。

子ら誓ふ清む声空へ原爆忌

千恵

ただしげさん・・・戦争の悲惨さは何時までも伝えて行行ってほしい

昇さん・・・広島平和記念式典の子ども代表の「平和の誓い」は今年も胸に響きました。力強い澄んだ声は天まで届いたと思います。改めて核兵器廃絶の思いを強くしました。

冷蔵庫なんとなく開け閉めにけり

康敏

百合子さん・・・”なんとなく”に思わず笑ってしまいました。

夕立に拍手にビール朝までと

國護

龍平さん・・・雨の降らない猛暑日続き 同感です。

隆さん・・・季重なりを避けて「夕立や酔いの進みし朝ぼらけ」でも。

念仏を唱ふ佾の踊りかな

亜也

康敏さん・・・鳴り物なしで、ひたすら念仏を唱えて踊る。東京佾島の念仏踊りだ。不思議な雰囲気である。

天牛さん・・・念仏踊りもまたいいでしょうね。

一点句

カキ氷頭にキーンで目眩する

忠彦

隆さん・・・「かき氷じわじわくるや頭痛（あたまいた）」でも。

秋雷に追はれるように駅舎へと

とみ子

※康敏さん・・・歴史的仮名遣いなら中七は「追はれるやうに」です。

将来は大看板や盆芝居

とみ子

康敏さん・・・盆芝居は夏興行と同様に若手为中心だ。この中から大看板を背負う役者が出て来る。

おのこふたり手つなぎ前を風涼し

千恵

亜也さん・・・あまり見たい姿ではないものの、ひらがなが和らげてくれる。ただ、夏の句のようです。

大輪の一期一会の蓮の花

ただしげ

千恵さん・・・大きく美しく咲いているところを観られるのは正に貴重な一期一会ですね。

早曉に蛸の鳴く軽井沢

ただしげ

天牛さん・・・軽井沢も暑くなりました。蛸だって季節がよくわかるのでしょう。

長岡の夜空に開く平和の花

ただしげ

※康敏さん・・・無季語です。平和の花は季語になりません。

花柘榴雨降る後の日に光る

ゆたか

隆さん・・・「雨止みて眩くなりし花柘榴」でも。

火柱の嶺移りおり今朝の雷

ゆたか

堂哉さん・・・大きな景色ですね！シンガポールでの激しい雷雨を思い出しています

川端に蛙（かはず）顔出す遠花火

啓子

隆さん・・・「川端に蛙鳴き止む遠花火」季重なりだが、「遠花火」が主になる。

早朝の青き蜜柑の憩ふこと

啓子

亜也さん・・・下五が早朝と呼応して絶妙。

草むらに真白き網の翻る

啓子

百合子さん・・・夏と言えば子供たちの虫取り、その子供たちによれば、この夏は蟬と蚯蚓が地中で死んでいるのだと・・・

※康敏さん・・・無季語です。草むらは季語になりません。

門火焚く子のはしやぎ声風が舞ふ

けい子

ただしげさん・先祖の霊も嬉しいでしょう



【次回青葉会予定】

第四百七十三回 青葉会

日時…令和七年九月二十五日（木）午後一時より

場所…世田谷区施設 三軒茶屋 しやれなあど6階会議室・ビーナス

ご出句について…今回から従来の句会開催致しますので、ご出句数の目処も従来通りに戻させていただきます。

句会ご出席者…当季雑詠 5句

ご投句のみなさま…当季雑詠 2句を目途としてお出してください。

ご投句締め切り…九月二十日（土）中

※その後の予定 句会と同日に「九月選句表」をお送りいたします。

九月選句締め切り…十月四日（土）中

九月句会報発行…十月十日（金）を目途と致します。

第四百七十四回青葉会…十月二十三日（木）午後一時より 於…しやれなあど6階

ご出句締め切り…十月十八日



【青葉会報】

一、この夏はもはや異常気象という言葉が使われないほどに常時誠に暑い日が続きましたため、通常の句会は七月、八月共に紙上句会とさせて頂いていただきました。その間、お体調を崩された方も居られたに拘わらず、変わらず御出句いただき、紙面ご協力を頂きましたこと、心から感謝申し上げます。

茲許第四百七十二回青葉会句会報をお届けいたします。

内容はご覧の通り、最高点十二点、次点十一点共に昇さんが獲得。続いて康敏さんが十点、七点共に、その間の八点到久しぶりのただしげさんが並びました。みなさま大変おめでとうございます。

この八月は、本来は秋の句になるはずが、体感的に夏真っ只中！という寄稿だったためか、夏の句が多く、選句に苦労されたかたも多かったように思われますこと、選句が大幅にばらけて二点句一点句も多くご披露できております。佳句でありながら選外句も十六句と多かった状況でしたことをご報告致します。

二、今月は孤舟選者がお休みを取られ、選者選もお休みとなっております。ご了承下さい。

三、八月はお盆。各地で様々なお盆の行事や追悼式典が行われました。

青葉会に於いても、今年四月にご逝去された故宮内規雄様への追悼ページを翌五月句会報に設け、嘗て句会を共にされた方々からの追悼句を掲載いたしました。その句会報をご長男、

雅嵩氏にお送りいたしましたところ、七月に左記のような御礼のご挨拶を頂戴致しましたので、左記ご了解を得て茲にお知らせ申し上げます。

「この度は父の追悼句を送っていただき、ありがとうございます。皆様の中に父との思いですが今も息づいていると思うと、心からうれしく、ありがたく感じております。

父は亡くなる少し前に「夢の中で会社の人々に会った」と話しておりました。もしかすると皆様との思い出を夢に見たのかもしれませんが。

いただいた句は、父の写真のそばに大切に飾らせていただきました。きっと父も喜んでいることと思います。

これからますます暑くなりますので、皆様どうぞご自愛ください。 宮内雅嵩

※七月句会報には掲載できず、お盆の時期にと茲許八月句会報にてお知らせいたしました。

四、関係者近詠

朝摘みの苺畑から病床へ 眞希子

柄の朽つも小鍋の手慣れ日々草 全

胎の児に長子添へ抱き子供の日 全

ホスピスの階段浅しカーネーション 全

噴水つんとつんと王妃のセーヴル展 弘子

坪庭のぽつと明るき甘酒屋 全

きりきりと巻髪の艶祭笛 全

たつつけの手古舞しやりん神輿牽く 全

神輿宮入五軒町それ旅籠町 全

抱くやうに琴運ばるる夕薄暑 全

巢のひとつ増えて燕の新所帯 全

すれちがひし海女の若さよゆたかさよ 青史

花は葉に羽織落としの恋ごころ 全

覗いてるわたしは他人サングラス 全

先づ香を聞くお持たせの一番茶 全

うすものをまとうてひとのかはりけり 全

あれも宿世これもすくせと昼寝かな 全

胸の辺り菖蒲うるさき湯にひとり 全

・・・森の座 横澤放川（日経新聞俳壇選者）選・・・

令和七年九月吉日

（了）